



沖縄・八重山文化研究会会報

第 23 1 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
Tel 〇九八八八二一五〇四三

沖縄・八重山文化研究会は、二月十九日役員会（三木・波照間・川平・漢那）を開き、今後の運営について検討した結果、当面、年に四回の開催（三月・六月・九月・十二月）とすること、また会長の三木健氏より健康上の理由により会長職を辞任したいとの申し出があり、役員会で了承したこととは、すでに会報第二二九号（二月十九日）でお知らせした通りであるが、このたび、波照間永吉氏が会長職を務めることとなった（任期二年）。

第二三一回沖縄・八重山文化研究会は、二〇一二年三月十八日、県立芸大付属研究所内で開かれ、松田良孝氏（八重山毎日新聞社）が「八重山―台湾間の人・モノの往来において台湾東部の漁港、南方澳が果たした役割について」と題して発表した。

松田氏は埼玉県出身、北海道十勝毎日新聞社の政経部記者を経て、一九九三年から八重山毎日新聞記者。著書に『八重山の台湾人』『台湾疎開―「琉球難民」の一年一カ月』がある。二〇一〇年には日本新聞労連のジャーナリスト大賞を受賞。

八重山―台湾間の人・モノの往来に
おいて台湾東部の漁港、南方澳が
果たした役割について

松田 良孝

与那国島は日本で最も西に位置し、台湾との間はわずか一一一キロ。これは、与那国島の西崎と台湾の南方澳を結んだ距離のことである。

でも、この近い距離を実際に訪ねるのはなかなか大変である。

定期的に運航している交通手段で八重山から南方澳へ行く場合、まず、四〇〇キロ以上離れた那覇へ飛び、そこから台湾の桃園国際空港へ行き、さらに一時間ほどかけて台北市の中心部へ出る。台北からはバスや鉄道で南方澳へ向かうのだが、どこかで乗り継ぎが必要だ。

石垣島を朝出ても、到着するのは夕方前である。季節や天候によっては、南方澳は薄暗くなっているかもしれない。

このように、大回りの末にようやくたどり着ける南方澳だが、日本が台湾を植民地支配していたころは、人びとは八重山と南方澳の間を島伝いに行き来することができた。

南方澳を訪れたなら、行っておきたい場所が三カ所ある。①南天宮②魚市場③第二漁港である。



南方澳が果たした五つの機能

南天宮は、航海安全の神、媽祖を祀る廟（道教の寺院）。媽祖を祀る廟は数多いが、その神像が金ぴかというのはここだけ。鉄筋コンクリート三階建ての堂々たる廟の最上階にはテラスがあり、漁船が船溜まりにぎっしりと並んでいる様子が見える。この船溜まりはT字型をしているのが特徴で、

一九二三（大正一二）年に造られたものである。日本統治時代、船でここに到着し、あるいはここから出ていく人たちのなかには、沖縄や八重山の人びとの姿があった。八重山と台湾の間を人やモノが往来するうえで、南方澳が果たした役割として、次の五点を挙げておきたい。

- ① 植民地台湾と八重山をつなぐ出入り口
 - ② 八重山・沖縄の人々の就労の場
 - ③ 軍事物資の調達ルート
 - ④ 植民地台湾からの引揚港
 - ⑤ いわゆる「密貿易」の取引先
- 南天宮のテラスから望む南方澳の港は、かつて、このような役割を果たしていたわけである。

カジキ漁

現在の南方澳には魚市場が二カ所ある。大型の魚たちが青々と転がっている第一漁市では、午前九時に競りが始まる。今はサメが目立つが、かつて、八重山の人たちが働いていたころは、大半がカジキだった。船首から台が突き出た突き棒（つきんぼ）船でカジキを追い、海面近くを泳ぐカジキに直接もりを打ち込む突き棒（つきんぼ）漁で仕留める。カジキは海が荒れると、海面下近くまで上がってくる。この特性を生かした漁法なので、海が荒れる冬

場が最盛期だ。突き棒船に乗り込んだ船員たちは波間に目を凝らし、カジキの尾びれが姿を現すのを探す。見付けたあとは、その場へ一目散。荒れた海に激しく上下する船首から、カジキを仕留める。そういう漁業が、南方澳など台湾の東海岸で行われ、八重山からやってきた男性が従事したケースもあったのである。

冬場を中心に南方澳に集まってくる漁船は二〇〇隻を超えた。すると、南方澳には漁業以外の商売も生まれ、そこへさらに沖縄の人びとが働きにやってきた。

裏南方

カジキやサメなどを扱う第一漁市とは対照的に、第二漁市は少量多品種タイプ。夕飯のおかずになりそうな小型の魚を一匹、二匹というふうに入購していく人もいる。

この第二漁市がある辺りまでが日本統治時代に浚渫された場所で、その先（南東側）は中華民国になってから築港された地域で、第二漁港と呼ばれる。

浚渫前の写真を見ると、そこには細長い池があり、その周りに民家とおぼしき建物が並んでいるのが分かる。日本統治時代、ここは「裏南方」とか「裏南方澳」などと呼ばれ、沖縄出身の漁民がまとまって暮らしていた。南方澳に漁港が整備される前か

ら、沖縄出身者が居着いていたことを示す資料も残っており、明治期からウチナンチュがいたと推定できる報告もある。

沖縄出身がまとまって暮らしていたことは分かっているのに、その実態は必ずしも明らかではなく、今はすでに失われている村。ミステリアスなニュアンスを込めて、私はかつて、裏南方のことを「消えた琉球人集落」と呼んだ。南方澳と沖縄出身者のかかわりを探るうえで重要な地点だということに、なぜ消えてしまったのか。そんな恨めしさを込めて、「消えた琉球人集落」と呼んだのである。

証言や資料から考えて、南方澳が八重山と台湾の結び目として重要なポイントであったことは間違いない。でも、実像がクリアになっていくわけではない。日本統治時代の南方澳を知る沖縄関係者は減り続けており、南方澳にいた八重山の人びとの姿をリアルに描き出す作業は年々難しくなってきた。

急務なのは、できるだけ多くの証言を聞きとっておくことである。当時の状況を記録した台湾側の資料を読むことも重要だ。資料のデジタル化が進み、使用しやすくなることにも期待したい。

文化短信

パイン導入顕碑建立へ
入植台湾人たたえる

沖縄にパイナップル産業と水牛耕作を導入した台湾農業者の功績をたたえるため、市内名蔵に「台湾農業者入植顕彰碑」建立が企画されている。このほど石垣市内の同産業関係者や農業者、学識者、華僑らを中心にする期成会が内容を発表し、「苦難を乗り越えパイン産業の基礎を築いた功績は大きい」と市民からの寄付を呼びかけた。県内のパイン産業は一九三五年、台湾から石垣島の名蔵・嵩田一帯に入植した約六〇世帯三三〇人の農業者が導入。水牛を用いた農耕とともに、八重山の農業に技術革新をもたらしたという。戦時中いったん生産は途絶えたものの、保管していた種苗から有志がパイン栽培を再開、戦後のパインブームの基礎を築き、地域経済を支えた。顕碑は高さ二・四〇メートルの閃緑岩製で中国語訳が付き、水牛のレプリカも設置。期成会は「パインの日」に当たる八月一日に落成式を実施する予定。
問合せは伊波会長、電話0980(82)2968

白保でシマフサラシ

白保住民の無病息災を願い、農作物の病害などを防ぐ伝統行事「シマフサラシ」がこのほど、白保の海岸で行われた。シマフサラシは、かつて疫病や農作物の病害で村が疲弊していたときにいったと伝えられる儀式で、わら縄を馬の血で染め集落の出入り口に張り、疫病防止を祈るにも、農作物を食い荒らすバッタやハエなどの害虫を載せたバショウの小舟を海に流し、疫病を追い払ったというのが由来。戦後の混乱などで五〇年ほど中断していたが、地域の伝統行事として二〇〇一年に復活した。

戦跡巡りで市民らが平和学ぶ

慰霊の日を前に、戦争の悲惨さや平和の尊さを感じ取る機会にしようと毎年行っている市教育委員会文化課主催の戦跡巡りがこのほど行われ、市民四〇人余が参加。今年も尖閣列島戦時遭難者死没者慰霊之碑や観音埼灯台下の銃眼痕、名蔵白水の戦争遺跡群など約一〇カ所を訪問。県平和祈念資料館の石堂徳一運営委員の説明を受けながら、バスで戦跡を回った。

新刊紹介

国永美智子・野入直美・松田ヒロ子
松田良孝・水田憲志編著
『石垣島で台湾を歩く
もうひとつの沖縄ガイド』

八重山と台湾の関係を再認識させるコンパクトでユニークな本である。筆者は研究者だけでなく台湾にルーツのある人、学生ら約二〇人。彼らが書くこと自体に意味があった、そんな本でもある。表紙の上半分は沖縄の地方ならどこにでもありそうな風景写真、下半分はパイナップルを思わせて真っ黄色の画面、その間に立つバス停。意味ありげな表紙に思わず手を伸ばしたくなる。「もうひとつの沖縄ガイド」「八重山発の地域教材」という副題をみると、さらに頁をめくりたくなる。活き活きした文章に豊富なカラー写真、クイズ形式で問題を投げかけたり、聞き書きやコラムでさりげなく歴史を語ったり、この本は読者の興味をそそる仕掛けがちりばめられている。ガイドブックとしても教科書としても使える本である。

台湾島の地図、石垣島および台湾を中心とした東南アジアの広域図が続く。冒頭に提示されるこれらの地図は、目に見える形で石垣と台湾の近さを雄弁に語る。日本の教科書には載っていない台湾。しかし石垣からすればこんなに近い台湾。「国境」という線引きはここでは無効であるかのように思える。

第1部「台湾」をテーマにした石垣島の歩き方。これは楽しい。紙上フィールドワークである。沖縄の基幹産業の一つであるパイナップルが実は戦前台湾から導入されたのが始まりで、沖縄で初めてパイナップルが作られたのは一九三八年、台湾の実業家が興した「大同拓殖株式会社」であり、台湾から石垣への三〇〇人近い移民によって大規模農場が開拓されたことがわかる。地元との軋轢や戦争の影響にもふれることを忘れない。ここで表紙のバス停が別の意味をもって浮かび上がる。また台湾系住民に伝わる伝統行事などを紹介。台湾の人の暮らしや文化を「もつと知ってみたい」という気持ちが生まれてくる。

第2部は「八重山のことをあまり知らないあなたへ」。琉球史のなかの八重山、戦後のパイナップル、復帰後の観光と開発問題など簡潔に示す。

第3部「八重山に生きる台湾系住民」では、台湾から移民としてやってきた人々の

歴史、入植した場所や体験者の語り、戦争マラリアや西表炭鉱にも大勢の台湾人がいたことなどが語られる。石垣に住む台湾系住民は自らのアイデンティティをどのように見出していくのか。

第4部「植民地台湾へ渡った沖縄の人びと」。植民地時代の台湾へは石垣からも多くの人が渡った。台湾に今も残る「沖縄」を示すとともに引き揚げ者の話を挟み込みながら、日本の植民地としての台湾と沖縄の関係を示す。

第5部「人びとをつなぐ海、分かち海」。与那国における戦後の密貿易の話、台湾に留学している若い人たちの話など、八重山と台湾の新しい関係づくり、その可能性をめぐらしたものである。

沖縄・八重山にとって台湾とは何だろう。歴史的やつながらりや文化的な親和性だけでなく、今も続く関係として、本書は台湾と八重山を見つめ直す格好の入門書である。(沖縄タイムス社、A5判 一四一頁 定価一五〇〇+税)

次回のお知らせ

- ★九月十六日(日)午後五時〜七時
- ★県立芸大附属研究所2F
- ★講師・演題は追ってお知らせします。